

高山市の観光と伝建地区の観光利用

2 回生 安部遊野

I. はじめに

高山市は面積約 2177 km²で日本一広い「市」である。それに対して、人口は 8 万 8566 人（2018 年 4 月 1 日現在）であり、多いとは言えない。また、高山市の中心部まで、県庁所在地の岐阜市からでも鉄道で 2 時間以上かかり、アクセスが良いとも言えない。その高山市に観光客が宿泊客だけでも年間約 220 万人（2017 年）が訪れている。これは高山市の人口のおよそ 25 倍の人数になる。また、高山市のある岐阜県の飛騨地域には、世界遺産に登録されている白川郷のある白川村や日本三名泉として有名である下呂温泉がある下呂市などがあるが、高山市は白川村や下呂市と比較しても近年特に観光客が増加している。こういったことから、観光は高山市にとって非常に重要な産業であると言える。

そこで本稿では、高山市の観光の現状や変化とともに、高山市の観光地の中から三町伝統的建造物群保存地区を取り上げ、近年観光客が増加している高山市の観光の特徴や伝建地区の変化を明らかにすることを目的とする。具体的には、高山市の観光の現状や変化を高山市の観光統計や高山市役所、飛騨・高山観光コンベンション協会へのヒアリングをもとに考察するとともに伝建地区の中で特に土産物屋や飲食店が集中している高山市上三之町が 1979 年に伝統的建造物群保存地区に選定されてから現在までにどのように変化し、観光客が多く訪れるような観光地となっていくのかを時代ごとに空間の変化を見ていくために 1975 年、2000 年、2017 年の住宅地図をもとに作成した土地利用図を活用して考察していく。

II. 高山市の観光

1) 高山市における観光の現状

まず、はじめに高山市の観光統計を用いて飛騨地域や高山市における観光の現状について概観していく。図 1 は 2015 年の岐阜県の各地域における観光消費額のうち宿泊の割合を示したものである。図 1 では、岐阜県を岐阜地域、東濃地域、中濃地域、西濃地域、飛騨地域に分け、それぞれの観光消費額のうち宿泊の割合を示したものである。これを見ると、飛騨地域が約 1085 億円で岐阜県全体の 67%を占めている。岐阜地域が 18%で次に多

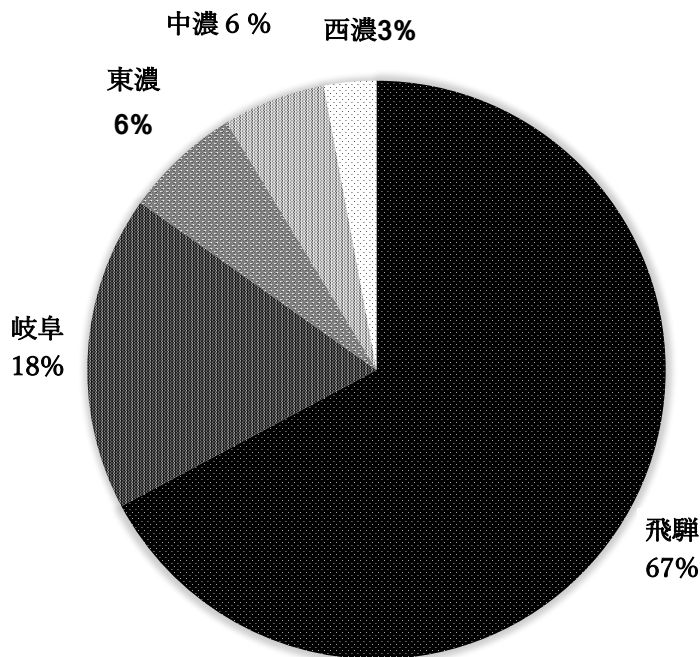


図1 岐阜県の各地域における観光消費額(宿泊)の割合(2015年)

岐阜県統計書より作成

n=1615億5808万1699円

く、続いて東濃、西濃、中濃となっている。飛騨地域は岐阜県の他地域と比べ、かなり観光消費額（宿泊）が多くなっている。要因としては、前述したように、高山市を含む飛騨地域の特徴として前述したようにアクセスがいいとは言えないということがあげられる。アクセスに時間がかかるために高山市で宿泊をする観光客が多くなっていると考えられる。

次に、高山市にしぼって統計を見ていく。図2は2009年から2017年の高山市全体の宿泊者数と外国人宿泊者数の2009年から2017年の推移を示したものである。今回、観光客数のデータのうち、より確かなデータである宿泊者数で高山市の観光の現状を考察した。高山市の全体の宿泊者数は2011年以降増加しており、2014年以降は200万人を超えている。さらに、近年は、2011年に宿泊者数が落ち込む前よりも宿泊者数が多くなっており、このことから高山市の宿泊者数が緩やかではあるが増加していることがわかる。要因としては次に述べる外国人の宿泊者数の増加が大きく関係していると考えられる。

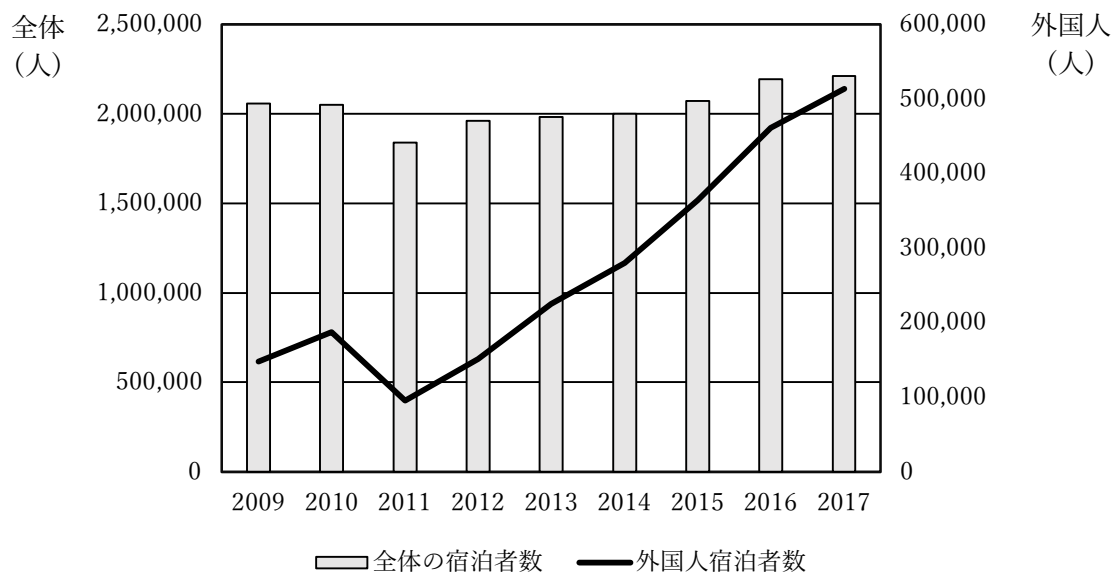


図2 高山市における全体の宿泊者数と外国人宿泊者数の推移
高山市統計資料より作成

外国人宿泊者数も2011年以降上昇しており、2011年には10万人以下であったが、2017年には2011年の5倍以上の50万人を超えるほど近年急激に増加している。2016年と2017年とを比較すると、2016年から2017年にかけて全体の宿泊者数が約19,000人増加しているのに対して、外国人宿泊者数は約52,000人増加している。この外国人宿泊者数の急激な増加によって高山市全体の宿泊者数が増加していると考えられる。外国人宿泊者数の増加の要因としては、高山市の積極的な外国人観光客の誘致や外国人観光客の観光しやすいまちづくりがあると考えられる。

図3は2017年の高山市における月別宿泊者数を示したものである。図3を見ると最も宿泊者数が多い月は8月で25万人を超えており、ついで10月、5月が多くなっており、いずれも20万人を超えている。それに対して、6月、12月の宿泊者数は他の月に比べて少なくなっている。全体で見ると6月のみが宿泊者数15万人を下回っており、それ以外の月は15万人を超えている。8月、5月に宿泊者数が多い要因としては、夏休みやゴールデンウィークがあり長期休暇を利用した旅行を行う人が多いからだと考えられる。10月に宿泊者数が多いのは、高山市にも多く訪れている中国、台湾、香港で10月に国慶節という休日があること、そしてこれと重なる時期に秋の高山祭があることが理由であると考えられる。高山市は図2で示したように外国人の宿泊者数が近年増加しており、その影響が

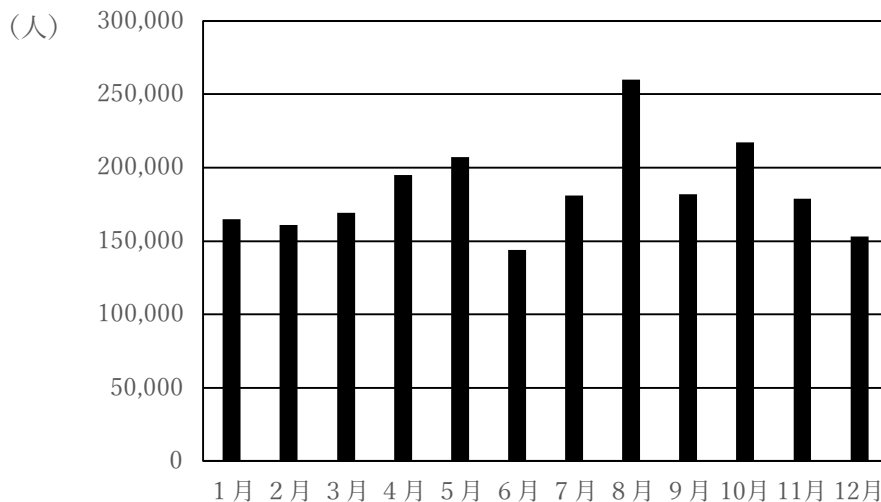


図3 高山市における月別宿泊者数（2017年）

高山市統計資料より作成

あらわれたとみられる。6月に宿泊者数が少ないのは高山市役所の方の話では、6月は、5月のゴールデンウィークと7月下旬からの夏休みの間であり、長い休みを取りづらいためであるとのことである。

表1は、外国人観光客の特徴を見るために、2017年の高山市における国別宿泊者数を示したものである。地域別に見て最も宿泊者数が多いのはアジア地域であり全体の約57%を占めている。ついでヨーロッパ地域が多くなっており全体の約17%となっている。国別に見るとアジア地域は台湾が最も多く、外国人宿泊者数全体のおよそ21%を占めている。ついで台湾、中国が多くなっている。ヨーロッパ地域ではスペインが最も多くなっており、ついでイギリス、フランスが多くなっている。

アジア地域、ヨーロッパ地域の宿泊者数が多いのは、高山市役所がアジア、ヨーロッパを中心に積極的に旅行会社やメディアなどの取材対応をしているといったことが影響していると考えられる。また、フランスの有名な旅行ガイドブックである、ミシュラン初の日本に関する実用旅行ガイド「MICHELIN Voyager Pratique Japan」において「必ず訪れるべき観光地」として高山市は最高の三つ星評価を獲得していることや、ミシュラン社の日本に関する旅行ガイド「ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン2009」において「わざわざ旅行する価値がある観光地」として高山市は最高の三つ星を獲得していることも大きな影響を与えていると考えられる。

さらにこの表1から読み取れる特徴としてイスラエルからの宿泊者数（10,494人）が多

表1 高山市における国別宿泊者数

地域名	国名	宿泊客数（人）
アジア	台湾	109,216
	香港	62,940
	中国	38,606
	タイ	29,942
	シンガポール	15,032
	韓国	11,994
	その他	27,147
	小計	294,877
中東	イスラエル	10,494
	その他	499
	小計	10,993
ヨーロッパ	スペイン	20,403
	イギリス	13,816
	フランス	13,091
	ドイツ	10,525
	イタリア	10,187
	その他	18,005
	小計	86,027
北米	アメリカ	22,645
	カナダ	5,213
	その他	-
	小計	27,858
中南米		5,657
オセアニア	オーストラリア	24,863
	その他	1,168
	小計	26,031
アフリカ		1,276
不詳		60,760
計		513,479

高山市統計資料より作成

いということも挙げられる。その数は韓国やドイツ、イタリアなどと同程度である。日本政府観光局（JNTO）の国籍別訪日外客数（2017年）のデータでは、2017年に日本を訪れたイスラエル国籍の人は32,758人であり、そのおよそ3分の1が高山市に宿泊している。高山市観光課によると、高山市のイスラエル人宿泊者数が多いのは第二次世界大戦時に約6,000人のユダヤ人を救った杉原千畝の記念館が岐阜県八百津町にあることが関係しているということだった。杉原千畝記念館を訪れるイスラエル人は多く、その際近くの高山市を訪れるケースが非常に多いということだった。さらに2016年7月に「杉原千畝ルート推進協議会」を岐阜県八百津町、高山市、白川村、福井県敦賀市、石川県金沢市で広域連携として設立し、海外でPRを行なっていることも影響を与えていると考えられる。

2) 高山市の観光施策と特徴

高山市は森林率92.1%（2018年4月1日現在）であり、自然豊かである。また古い町並みや2016年ユネスコ無形文化遺産に登録された春・秋の高山祭など歴史的な文化資源も多く存在する。さらに飛騨春慶、一位一刀彫などの伝統工芸品、飛騨牛、日本酒などの食文化も高山市の大きな魅力である。このような多くの魅力を持つ高山に観光客を多く呼び込むために高山市は様々な施策を行なっている。

高山市が積極的に行なっている観光施策の一つとして広域連携がある。高山市は近隣観光地を広域観光としての重要な連携先として捉え、広域連携に力を入れている。表2は高山市が関係している主要な広域連携の名称、広域連携の構成団体、広域連携で行なっている主要な事業を示したものである。表の構成団体を見ると高山市は県内だけでなく近隣の石川県、長野県、富山県なども連携して高山市のPRを行なっていることが分かる。この広域連携では、主に連携している自治体などと連携して広域観光のパンフレットを作成したり、首都圏でのPRやツーリズムEXPOに共同で出展するなど広域での魅力発信を行なっている。また、高山市役所だけではなく、観光協会であると同時に高山市での会議やイベントなどを支援している組織である一般社団法人の飛騨・高山観光コンベンション協会も高山市役所とともに広域連携に加わるなど官民一体となった取り組みを行なっている。

高山市の観光施策の二つ目の特徴として、外国人観光客が観光しやすい街づくりがある。高山市は1986年に国際観光都市宣言を行なっている。国が観光立国宣言をしたのは2003年であり、高山市は早い時期から海外に向けたPRを行なっていることが分かる。この結果、高山市には外国人観光客が多くなっている。また、高山市は多くの外国人観光客が安心して観光を楽しめるようにするために工夫がなされている。写真1は高山市の市街地にある多言語併記の案内看板である。高山市ではこのような多言語併記の案内看板、支柱型40ヶ所、路面埋め込み型65ヶ所（260枚）を整備している。さらに写真2は様々な言語で作成され

表 2 高山市が関係している主要な広域連携

名称	構成団体	事業
飛騨地域観光協議会	高山市・飛騨市・下呂市・ 白川村・岐阜県	・飛騨地域のパンフレット等作成 ・NEXCO 連携事業 ・JR 東日本連携事業 等
北陸・飛騨・信州 3 つ星街道観光協議会	高山市・金沢市・南砺市、 白川村・松本市・ 各自治体の観光協議会	・モニターツアー実施 ・ツーリズム EXPO 出展 ・広域観光パンフレット 等
ぶり街道推進協議会	高山市・飛騨市・富山市、 松本市・各市の商工会議所・ 商工会・観光協会・ 国土交通省の国道事務所	・SA キャンペーン ・パンフレット製作 ・首都圏での PR 等
杉原千畝ルート推進協議会	八百津町・高山市・ 白川村・敦賀市・金沢市	・海外へ PR ・メディア発信 等

高山市役所資料、聞き取り調査より作成



写真 1 高山市の多言語併記の案内看板
(2018年9月撮影)



写真 2 様々な言語で作成された散策マップ
(2018年9月撮影)

た散策マップである。散策マップは、現在日本語・英語・中国語（簡体字、繁体字）・フランス語・ドイツ語・スペイン語・イタリア語・韓国語・タイ語・ヘブライ語の 11 言語が作成されている。このように他の多くの観光地にもある英語や中国語だけでなく、他の観光地にはあまり見られないタイ語やヘブライ語にも対応している。その他外国人観光客を対象に実際に古い町並みを歩いてもらい、良い点や改善してほしい点など様々な意見を出してもらうモニターツアーを行ない、こうした外国人の意見を観光施策に取り入れ外国人が観光しやすい観光地づくりも行なわれた。また、高山市はさらなる外国人観光客の増加に向けて海外への PR も依然として力を入れている。日本政府観光局（JNTO）の海外事務所にて外国語の高山の観光パンフレットを設置したり、観光展・旅行博への出展を行ったりするなど、外国人観光客の積極的な誘致を行なっている。さらに、旅行代理店・メディア等の取材対応も積極的に行なっており、取材対応数は 2016 年の 56 件から 2017 年には 65 件に増え、人数は 332 人から 464 人に増えている。

高山市の観光施策の三つ目の特徴として、滞在型・通年型の観光地づくりが挙げられる。この大きなものとして飛騨高山ウルトラマラソンの開催がある。図 3 に示されるように高山市は 6 月の宿泊者数が少なく、さらに 6 月に大きなイベントがなかったため 6 月にも観光に来てもらうことを目的として 2012 年から始まった。このマラソンは高山市内がコースであり、マラソン目的で初めて高山に来た人が高山の魅力を感じられるようになっている。この飛騨高山マラソンを含め、4 月と 10 月に行われる高山祭、8 月の飛騨高山手筒花火打ち上げ、2 月の平湯大滝結氷まつりなど四季を通じたイベントを開催し、一年を通して高山に来てもらおうとしている。

このような高山市の観光における広域連携や海外への PR に加えて外国人観光客に向けた観光地づくり、滞在型・通年型の観光地づくりによって宿泊者数が近年伸びていると考えられる。

III 高山市の伝建地区

1) 伝建地区の概要

伝統的建造物群保存地区は全国各地の城下町、宿場町、門前町など歴史的な集落・町並みの保存を目的としたもので、市町村は保存条例に基づいて保存計画を定める。国はその市町村からの申し出を受け、価値が高いと判断したものを重要伝統的建造物群保存地区に選定する。高山市では、1997 年に三町伝統的建造物群保存地区が、2004 年に下二之町大新町伝統的建造物群保存地区が、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。三町伝統的建造物群保存地区は、上三之町・上二之町の通りを中心とした地区である（図 4）。表 3 は高山

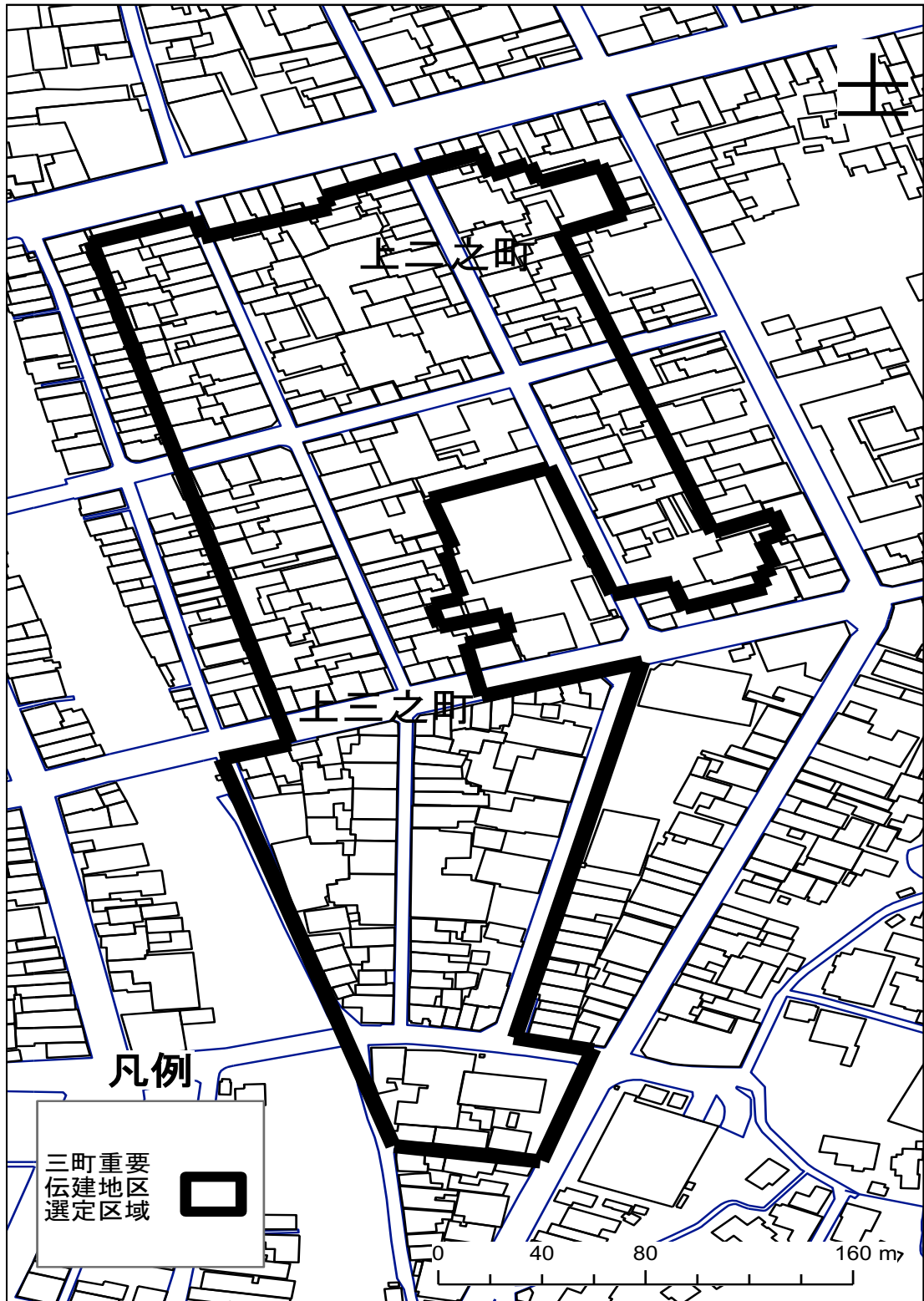


図4 高山市三町伝建地区の選定区域の範囲

高山市役所資料より作成

表 3 保存地区関係年表

年	出来事
1966 年	上三之町町並保存会結成
1972 年	「高山市市街地景観保存条例」制定
1977 年	「高山市伝統的建造物群保存地区保存条例」制定
1979 年	高山市三町伝統的建造物群保存地区選定
1982 年	高山市景観町並保存連合会結成
1996 年	「高山市三町伝統的建造物群保存地区」拡大選定
1997 年	三町伝建地区、重要伝統的建造物群保存地区の選定
2004 年	「高山市下二之町大新町伝統的建造物群保存地区」が重要伝統的建造物群保存地区に選定

高山市役所資料より作成

市の保存地区の選定に関する年表である。高山市では古い町並みを保存するために 1966 年に初の保存会である上三之町町並保存会が結成された。その後伝建地区内に 12 の町並保存会が結成された。1977 年に高山市は「高山市伝統的建造物群保存地区条例」を制定し、その 2 年後の 1979 年に高山市三町伝統的建造物群保存地区が選定された。「高山市三町伝統的建造物群保存地区」は重要伝統的建造物群保存地区に選定される前年の 1996 年に保存地区の範囲を拡大している。

今回は高山市三町伝統的建造物群保存地区の中で特に土産物屋や飲食店が集積している上三之町を取り上げる。そして上三之町がどのように土産物屋や飲食店の集積する観光地へと変化していったのかを調査するために土地利用図を用いて考察する。

2) 高山市上三之町の土地利用の変化

ここでは、高山市三町伝統的建造物群保存地区の中で近年国内や海外から注目され観光客が多く集まっている上三之町に焦点を当てていく。上三之町は江戸時代の古い町並みが残っており、現在では多くの土産物屋や飲食店があり多くの観光客で賑わっている。しかし以前からずっと土産物や飲食店が多くあったわけではない。ここでは上三之町の土地利用の変化を検討していく。

±

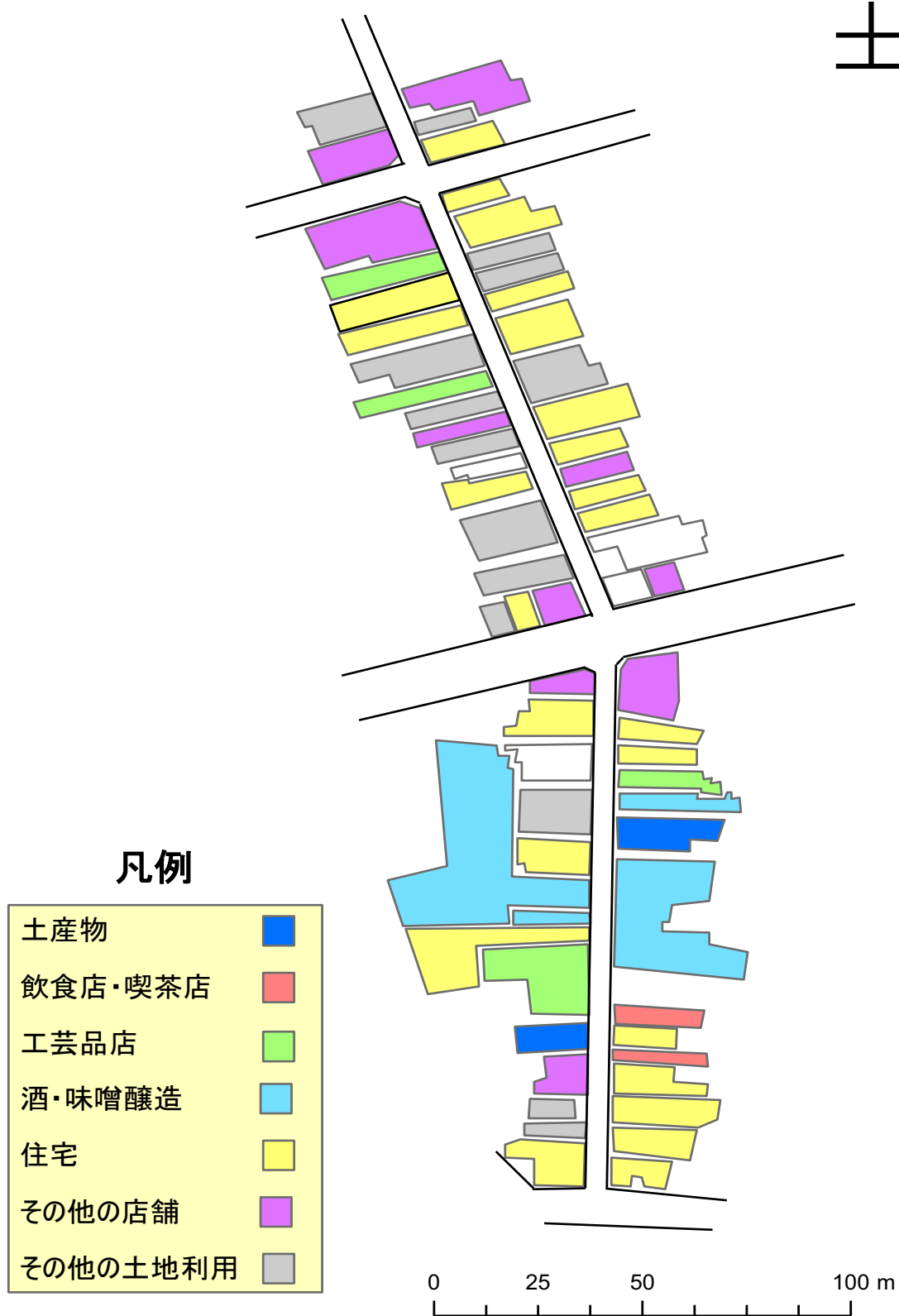


図5 高山市伝建地区上三之町(一部)の土地利用 (1975年)

住宅地図より作成

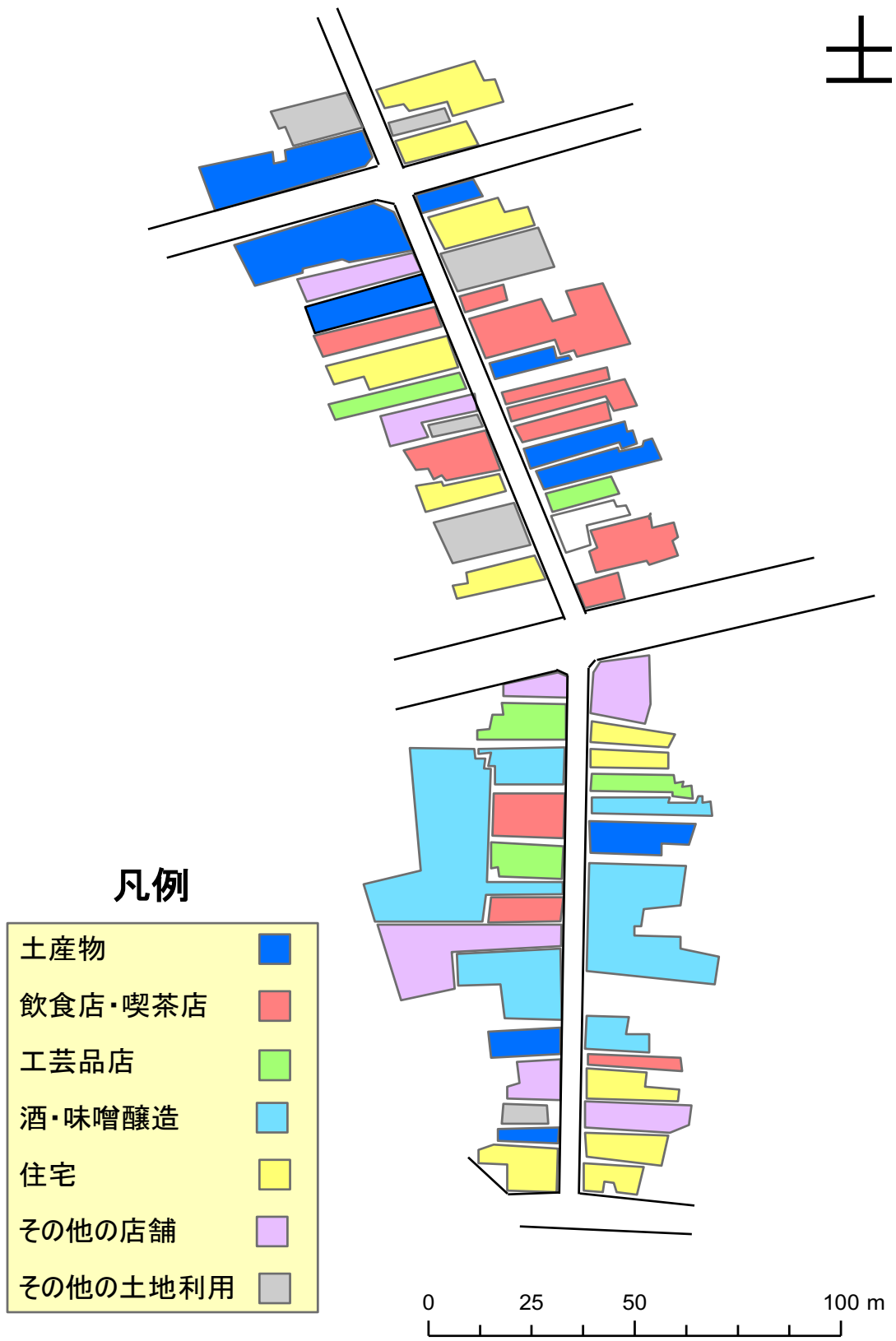


図6 高山市伝建地区上三之町(一部)の土地利用 (2000年)

住宅地図より作成

±

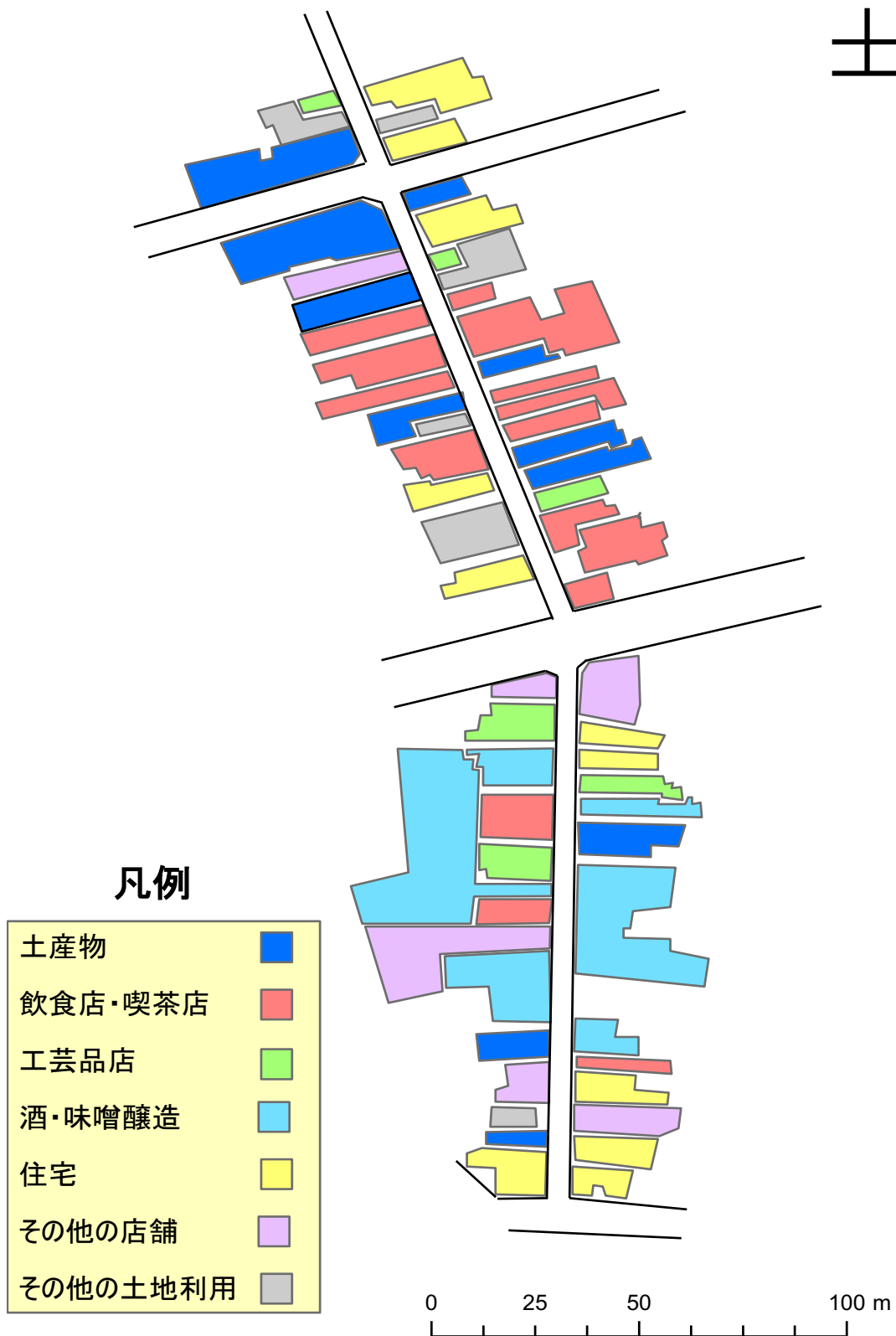


図7 高山市伝建地区上三之町(一部)の土地利用 (2018年)

住宅地図、現地調査より作成

表4 上三之町(一部)における土地利用の変遷

土地利用	1975年	2000年	2018年
土産物屋	2	10	11
飲食店・喫茶店	2	13	15
工芸品店	4	5	6
酒・味噌醸造	4	6	6
住宅	24	11	11
その他の店舗	10	7	6
その他の土地利用	14	7	6

図5・図6・図7より作成

分析には高山市が1979年に伝統的建造物群保存地区に選定される前の1975年と2000年、2017年の住宅地図を用いてそれぞれ土地利用図を作成し、町の移り変わりを見ていく。2018年の土地利用図は、2017年の住宅地図をもとに、筆者が2018年9月に行った現地調査の成果も反映させて作成したものである。ここでの土地利用図は、建物を、この地区で比較的良好に見られる、土産物屋、飲食店・喫茶店、工芸品店、酒・味噌醸造、住宅、その他の店舗、その他の土地利用に分けて示した。その他の店舗とは土産物屋、飲食店、喫茶店、工芸品店以外の店舗である。なお、旅館、病院などはその他の土地利用に含まれている。また表4は土地利用図の中で分類したものの合計値をまとめたものである。

まず図5と図6から1975年から2000年の変化を考察する。上三之町は高山市三町伝統的建造物群保存地区内にあり、高山市三町伝統的建造物群保存地区は1979年に国の指定を受けた。1975年は保存地区が国の指定を受ける前で、2000年は国の重要伝統的建造物群保存地区に指定された後である。図5と図6を比較すると全体的に大きく変化している。表4より1975年から2000年にかけて土産物屋と飲食店・喫茶店がそれぞれ2軒から10軒、2軒から13軒と大きく増加している。一方で住宅が24軒から11軒と大きく減少している。工芸品店や酒・味噌醸造も増加しているが、その変化は小さい。

中央の大きな通りで区切って北側と南側で細かく見ていくと、北側がより変化が大きくなっている。北側は1975年には主に住宅や生活用品店が多くあり、商店街というより住宅地区のようになっており、観光客を多く集めるような土地利用にはなっていなかったとみられる。それに対して、2000年には飲食店や土産物屋が多くあり、1975年に多かった住宅

やその他の店舗は減少している。1979年に国指定の保存地区になってからおよそ20年の間に観光客を対象とした商業地区となったとみられる。南側は、酒や味噌を醸造しているところが多く、その酒や味噌を売っている店舗が1975年時点でもあったようだ。北側に比べて大きく変化はしていないようだが、北側と同じように住宅が1975年から2000年のおよそ25年間で減少している。南側は酒・味噌醸造とその販売を中心とした地区であり1975年から2000年にかけてその形態は大きくは変化していないが、2000年には飲食店と土産物屋が1軒ずつ増加しており北側と同じように観光客を対象とした店舗は増えているとみられる。

次に図6と図7を比較する。2000年から2018年にかけては、表4からわかるように大きな変化はない。住宅やその他の店舗の数に変化はなく、土産物屋が10軒から11軒、飲食店・喫茶店が13軒から15軒と若干増加した程度である。南北に区切って見てみる。北側は道路の東側では大きな変化はない。それに対し道路の西側では飲食店・喫茶店が2軒、土産物屋が1軒増加している。北側は大きな変化は見られなかったが、2000年から2018年にかけて、より観光客に向けた土地利用になっていった。南側の土地利用も2000年から2018年にかけて変化はしていないが、酒や味噌を土産として観光客に向けて売り出すなど、観光客を対象とした空間になっていった。

次にひとつひとつの建物に焦点を当てて見てみると、それぞれの建物の土地利用の変化には大きく3つのパターンがあることが分かった。1つ目はもともと生活用品などを売っていた店が飲食店・喫茶店や土産物屋に転換したもの、2つ目はもともと個人の住宅だったところにそのもともとの住人が商売を始めるもの、3つ目は外部から入ってきて商売を始めたものである。特に北側はこの3つのパターンによって変化していった。

全体をまとめると上三之町は国指定の保存地区となった後に、古い町並みを楽しみに来た観光客を対象とした商業地区に変化していき、2000年には飲食店や土産物屋が多くを占めるようになった。2000年から2018年にかけても、特に北側で飲食店や土産物屋が増加しており観光客を対象とした商業地区化が進んでいる。北側で特に変化が大きかった要因としては、北側に住宅が多く、酒や味噌の醸造元が多かった南側に比べて変化しやすかったのではないかと考えられる。

ここまで3つの土地利用図を比較して上三之町の土地利用の変化を見てきたが、なぜ上三之町は国指定の保存地区となった後に、住宅地区から観光客を対象とした商業地区へと大きく変化していったのか。高山市役所や飛騨・高山観光コンベンション協会によると、上三之町は大正期にはもともと商店街として賑わっていたという。しかし1934(昭和9)年に高山駅が市街地から少し離れたところにでき、商業の中心が高山駅周辺の方へ移ってしまい、上三之町の商業はだんだんと廃れていってしまったとのことである。上三之町が国指定の保存地区となった後、観光客を対象とした商業地区として変化していったのはもともと

商業地区であったこと、そして近代以前の商業地区の景観が残っていたことが背景であるのではないかと考えられる。

IV. おわりに

本稿では高山市の観光の現状や特徴、上三之町の保存地区の変化を見てきた。高山市は人口およそ 9 万人の都市であるが、その都市に現在年間宿泊者数だけで 200 万人以上、外国人に限っても 50 万人以上訪れている。言うまでもなく高山市にとって観光業は非常に重要な位置付けとなっている。また高山市も観光客を増やすために様々な試みを行なっており、広域連携や早い段階での海外への売り込みによって、現在でも高山市を訪れる観光客は特に外国人が増加している。さらに高山市では観光客を単に呼び込むだけではなく、外国人を対象としたモニターツアーを通して、外国人観光客にも観光しやすいまちづくりを進めている。しかしその一方で、課題として観光客が高山市街地エリアに偏ってしまっていることが挙げられる。高山市は自然豊かであり温泉地も多く、市街地エリア以外にも平湯温泉・福地温泉・新平湯温泉・栃尾温泉・新穂高温泉からなる奥飛騨温泉郷や樹齢 500 年余になる荘川桜など魅力的なスポットが数多くある。今後はそういった市街地エリア以外のスポットにも多くの観光客が訪れるような仕組みづくりが必要だと考える。

高山市の保存地区にある上三之町は国指定の伝統的建造物群保存地区となった後、古い町並みを目的として来る観光客を対象とした土産物屋や飲食店・喫茶店を中心とした商業地区に大きく変化していった。しかし飛騨・高山観光コンベンション協会によると、上三之町のように古い町並みに土産物屋や飲食店が入り、外観は江戸時代の古い町並みだが、建物の中は現代のものになっているものが増え、建物の中は古い町並みの雰囲気を楽しめないという意見もあるという。今後は観光客が求めていることにも目を向けた上で、さらに保存地区がどのように変化していくことが望ましいか検討する必要があるのではないかと考える。

—注—

¹ 図 1 における岐阜県の各地域の構成は、高山市統計資料によると、岐阜地域が岐阜市・本巣市・山県市・瑞穂市・羽島市・各務原市・北方町・笠松町・岐南町・東濃地域が多治見市・中津川市・恵那市・瑞浪市・土岐市、中濃地域が郡上市・美濃市・関市・美濃加茂市・可児市・富加町・坂祝町・御嵩町・八百津町・川辺町・七宗町・白川町・東白川村、西濃地域が大垣市・海津市・揖斐川市・大野町・池田町・神戸町・安八町・養老町・輪之内町・垂井町・関ヶ原町、飛騨地域が高山市・下呂市・飛騨市・白川村である。

－付記－

本稿を作成するにあたり、飛騨・高山観光コンベンション協会の小瀬光則様、高山市役所商工観光部観光課の和仁奈緒子様、高山市教育委員会文化財課伝統文化係の牛丸岳彦様には、お忙しい中にも関わらず大変お世話になりました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

－参考文献－

- ・ 高山市ホームページ（高山市統計資料）<http://www.city.takayama.lg.jp>（2019年1月16日最終閲覧）
- ・ 日本政府観光局(JNTO)ホームページ https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor_trends/（2019年1月14日最終閲覧）
- ・ 文化庁ホームページ <http://www.bunka.go.jp>（2019年1月14日最終閲覧）

